

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320030

研究課題名(和文) 美術と宝物の相関性についての比較美術史学的研究

研究課題名(英文) Comparative Art Historical Studies on Relationship of Art and Treasure

研究代表者

秋山 聡 (Akiyama, Akira)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：50293113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,900,000円、(間接経費) 4,770,000円

研究成果の概要(和文)：ハンス・ベルティンクが芸術ではなくイメージという用語を用いて中世キリスト教美術を見直したように、本研究においては、宝物という概念を軸に、洋の東西の美術史をとらえ直そうと試みた。美術ないし芸術という概念が未発達だった時代に、宝物として扱われた事物は、必ずしも現在の美術作品あるいは文化財という概念と一致するものではなかったこと、またしばしば消耗品の性格を有していたこと等が明らかとなり、宝物への着目が前近代の造形イメージを総体として把握しうる手段として有効であることが判明した。本研究の過程で国際的な研究者のネットワークが形成され、今後の比較美術史研究にとっての基盤となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：While Hans Belting used a term "image" to describe art history before the age of "art", our research project has tried to revise art history through applying a concept "treasure" instead of "art" not only in Europe but also in East Asia. In the course of the research some key topics have emerged around the issue of the relationship of visual arts and treasures: for example, differences between the concept "treasure" and its modern equivalent concepts like "cultural property" or "art works". Treasures were often used as instruments for diverse kinds of ritual and had a character as consumable goods in pre-modern era. Therefore, it has become apparent that the concept "treasure" should be an effective means to overview art history on the whole both in Europe and in East Asia. The international network of art historians in diverse fields, which has been nurtured through this research project, will enhance comparative art historical approaches.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：美術史

キーワード：西洋美術史 宗教美術史 比較美術史 日本・東洋美術史 宝物 聖遺物 聖像 所蔵目録

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、デューラーを中心とする 15、16 世紀美術を研究する過程で、聖遺物崇敬が美術の歴史的発展に与えた影響について興味を抱き、聖遺物崇敬と美術の相関性についての研究を展開してきたところ、その研究成果が日本学術振興会賞やサントリー学芸賞受賞という形で一定の評価を受けた。また、聖遺物崇敬に取り組む過程で、仏教美術をはじめとする他の宗教文化における類似事例や現象に興味を引かれ、比較宗教美術史的観点からの聖像崇敬について研究(「像の生動化についての比較美術史的研究」平成 20 - 22 年基盤研究(B))を行なってきた。このような中で、前近代の造形について語る際に、美術あるいは芸術という用語の不便さを痛感するに至った。ハンス・ベルティンクは美術に代わってイメージという言葉により中世美術史を概観しなおす試みを行なったが、聖遺物および聖像崇敬に重点を置く立場から、研究代表者は宝物という概念でもって、洋の東西の中近世美術を見直してみようと考えようになった。

2. 研究の目的

近代以前の美術に対して、美術あるいは芸術という観点からのみ考察することの限界が近年とみに認識されつつある。本研究は、近代的芸術概念が定着する以前の美術を宝物という観点から見直すことによって、近代の美術史学が分解する以前の造形物のありようを総体としていくばくかなりとも明らかにしようとするものである。宝物と美術との相関性を重視し、宝物がどのように観られていたのか、宝物がどのようにして美術、あるいは美術がどのように宝物とみなされるようになったのか、そもそも宝物とは何か、また今日の「文化財」との相違はどこにあるのか等について、洋の東西の個別事例を精査するだけでなく、相互に比較研究することにより、地域を越えた普遍的現象と地域特有の現象を弁別し、より有効性の高い比較宗教美術史的研究に資する普遍的な解釈モデル形成の一助となることを、本研究は目的としている。

3. 研究の方法

西洋美術史担当者は、関連文献の博捜と入手に努めるとともに、夏季休暇期間等を利用して、西欧各地の教会宝物室、美術館、博物館等で行なった。また美術史学的方法論を相対化するために連携研究者として文学研究者 2 名を得て、聖遺物を中心に宝物概念についての調査を依頼するとともに、コラン・ド・プランシーによる『聖遺物・聖像辞典』の読解・翻訳作業の協力を得た。さらに、研究代表者(秋山)は、国立民族学博物館の共同プロジェクト「物質性的人类学」に共同研究員として参加する機会を得、適宜本研究による成果を発表し、人類学ならびに考古学分

野からの意見や批判を得て、本研究を学際的観点から相対化することができた。また国際美術史学会第 33 回ニュルンベルク大会において研究代表者は、宗教美術史セクション(第三セクション)の共同座長に任じられたが、そこでの議論や経験は、本研究の比較宗教美術史的アプローチに裨益するところが大きかった。さらに、在フィレンツェ、ドイツ美術史研究所との共催で開催された国際会議「SEN:線と線ならざるもの」においても、宝物としての聖者の足跡についての発表をすることにより、比較宗教美術史的観点を推進し、内外の研究者の意見を求めることができた。

日本・東洋美術担当者は、主として台湾、中国、米国および関西地方において作品調査を行なった。とりわけ谷文晁作品については、大学院生等を動員しての大規模な調査研究を展開した。東洋美術担当者(板倉)は、複数の国際会議に参加し、研究成果を発表し、相対化の機会を活用した。

また学内外の研究者に発表を依頼しての国内における研究会の開催に加えて、最終年度にはチューリヒ大学およびフリブル大学においてこれまでの研究成果の提示を含めた研究会を開催し、本研究の相対化や意見交換に務めた。

4. 研究成果

- 西洋美術史に関して: 研究代表者(秋山)を中心として主として教会宝物についての研究を重点的に行なった。聖遺物は教会宝物の代表的なものとして大きな比重を占め、その容器の制作という点で、美術の歴史的展開に大きな影響を与えてきたが、今回は聖遺物・聖遺物容器に加えて、宝物としての典礼用具に関する研究を進めた。また、聖俗両世界の宝物目録の分析を行ないつつ、教会宝物の具体的な保管および利用の諸相を探求し、教会宝物とは何かについて考察をした。

その結果、典礼用具における聖性価値が、基本的には聖遺物・聖遺物容器の聖性についての原理(いわゆるウィルトスの原理)によって大よそ説明が付けられることが判明した。典礼用具の内、特に重視される Vasa sacra とは、聖変化した聖体と接触する器を指す。聖体奉挙によって聖体ないし聖血に実体変化したパンとワインは、聖遺物と同様にウィルトスを帯びると考えれば、聖体拝領に関わる容器が、聖体・聖血と直接の接触を有する

ことによって、教会宝物の中で一等高い聖性を有するとみなされ、また聖血用ストローや、ホスティア製造用鉄製型のような事物すらもが宝物に含まれることも理解しやすくなる。聖像をも含めて、宝物が原則として使用されることを前提としていたことにも一層注目する必要があると思われる。今日の文化財あるいは芸術作品についての保存の意識と、前近代の宝物における道具的性格との相違は小さくなく、このズレについての認識が重要になると思われる。

なお、教会宝物目録とともに、世俗宮廷の宝物目録についても大学院生等の協力を得ながら調査を試みた。その結果、ものによっては精細なディスクリプション、場合によってはエクフラシスと言ってもよいような記述をともなう目録の存在が確認された。従来の絵画史研究の枠組みの中では、審美的価値に関する評価を伴う所蔵目録は1500年前後になって漸く現れるとされてきたが、金細工工芸等に関しては14世紀半ばの目録に、すでにその萌芽が見出せることが確認された。この点でも、金細工工芸に対する鑑賞的態度が、絵画に先駆けて成立していることがうかがわれ、一層掘り下げて研究する必要性を痛感するに至った。

なお、連携研究者として参加した文学研究者2名は、聖遺物崇敬を基本に置きつつ、各自の専門分野において宝物について考察を展開した。宝物としての聖遺物/聖遺物容器という観点から考え直すと、「芸術」を記憶装置という機能と、呪具という機能から眺め直すことが可能だという。また近代文学におけるレトリックの中で、「聖遺物」はそれを所有する本人たちにとってのみ限りない価値を持つが、他の人にとってはどうでもよい「がらくた」であって、越えることのできな価値観の断絶を表すものを意味するが、それは中世以来の聖遺物崇敬ないし宝物観を前提としてのことである。

- 日本・東洋美術史に関して: 研究分担者(佐藤)は、美術品が誰によって収集され、宝物として愛蔵されるかという局面に焦点を合わせた調査研究を、主として江戸時代絵画を対象に実施した。たとえば、與謝蕪村の「四季山水図」は、彼の有力なパトロンだった寺村百池の家に伝わったものであり、岩佐又兵衛の「伊勢物語 梓弓図」、福井の豪商金屋家に伝来した屏風絵の一図であったものである。前者は、おそらく蕪村が当初から百池という顧客のために制作したという事情をうかがわせ、後者においては、福井藩主から下賜された家宝としてきたという伝承を有するゆえに、又兵衛がもともと越前北之庄の藩主であった松平忠直からの注文で制作したことを推測させる。屏風全体の、とりわけ「梓弓図」の伝統を逸脱した表現を、そのような伝来から遡って解釈することが可能である。なお、この間の調査研究を総合して、改訂版として執筆した『日本美術史』にも、それに対応する放送のプログラムにも、室町時代の唐物愛好や明治政府による宝物調査といった話題が加えられた。

研究分担者(板倉)は、東山御物について、中国大陸、台湾故宮博物院に現存する同一画家の作品を調査し、日本に伝来する作品との共通点と差異について考察した。日本に室町時代以来伝存する馬遠「禅宗祖師図」(天龍寺)、梁楷「出山釈迦図」(東京国立博物館)等は、宮廷画家による禅宗の主題という組み合わせであり、中国歴代王朝に伝世したものと共通したレベルでありながら、日本にしか伝わらないものの典型と言える。それらが日本においては中世以降、最も価値のある中国絵画として君臨し続けたことになる。そのため、「東山御物」という伝称自体、価値を伴った「伝説」として、江戸時代以降、複数の作品に付与されたことも確認された。

また、谷文晁が経営した写山楼の模本群は、

江戸時代後期～近代にかけての中国絵画を含む古画の所蔵状況を確認するためには最も有効なもので、これと版本を組み合わせることで、当時における古画の価値体系の実態を復元することに成功した。その結果、江戸時代に既に近代において重要視される作品の価値体系がかなり準備されており、宝物から美術への移行の準備が前近代においてなされていたことを確認した。

この他、学内外の研究者の参加を得て開催した研究会では、中国の皇帝コレクション、正倉院、江戸時代後期南画画家の個人コレクションなど、様々なコレクションを東山御物と比較する機会を得たが、そうした研究交流を通じて、中国においては宋時代以降、宝物的もしくは仏教的な要素が抑えられることが確認されるとともに、日本における宝蔵等の蔵の特性が浮かび上がってきた。また、欧米の近代における東アジア美術コレクションは、中国の文献考証的なアプローチと日本の伝統的な鑑定によって形成されはしたが、コレクション成立の経緯に基づいて異なる性格を有していることも明らかとなった。

平成 24 年度から連携研究者として、最終年度は研究分担者として参加した高岸によると、伏見宮貞成親王（1372～56）の日記『看聞日記』には、將軍足利義持・義教・義勝との間で、絵画をはじめとする美術品や、楽器などを含む宝物が、相続・継承されたり、購入・修復・新調・転写・鑑賞・鑑定されたりした実態が記されている。こうしたプロセスを経て、室町期における宮家の権威の維持や上昇、公武間での文化的覇権をめぐる協調や競合した側面が明らかとなった。

- 比較美術史的観点から：前近代の宗教的組織の宝物目録の比較の結果、前近代における宝物は、今日の文化財に代表されるような宝物とは異なる処遇を受けていたことが明らかになった。具体的には、洋の東西を問わ

ず、宝物一般は、使用価値を保持しており、儀礼等における使用を前提とされたものが多い。そのため通常は厳重な管理のもの保存されているが、必要に応じて取り出され、実用に供された。また、具体的な宝物の儀式における利用例として、キリスト教と仏教における像を用いた儀礼を比較した。

宝物室ないし宝蔵という、宝物を保管する場所が、そこに保管される事物に聖性価値を付与するという面が確認された。当初は、しかるべき宝物が安置されたことにより、宝物室／宝蔵が徐々に神聖視されるにいたっただろうが、宝物の置かれる場自体が、一種の聖性を帯び始めた節が、洋の東西を問わずかがわれる。また、なぜ宝物とみなされるようになったのかが不分明な事物が少なからず確認される。例えば正倉院には竜のミイラが、ウィーンの聖シュテファン教会には、クジラの骨が大切に保管された。これらが宝物視される当初の契機はさまざまにあり得たであろうが、ある段階以降は、宝物室／宝蔵に保管されていること自体が、それらが宝物であることについての十分な説明となった可能性が高い。また、こうした素性のよくわからない、かつ物語が付着した珍奇な事物は、西洋においてはいわゆる「驚異の部屋」の源流としての「教会宝物室」の意義を浮かび上がらせるように思われる。一方、日本・東洋においては、「カップの手」や「雷のへそ」等が社寺に大切に保管されているように、伝統が続いている面があることが浮かび上がった。

なお研究代表者は国際美術史学会のニュルンベルク大会において宗教美術史セッションの共同座長を務めたが、その際、世界各地における宗教美術研究が深化しつつあるものの、極度に細分化しており、個々の成果を承けての異なる地域・宗教間での比較研究がまだあまり発展していないことが確認され、この方向での一層の研究展開の必要性を

痛感するに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 20 件)

秋山聰、「西洋中近世のキリスト教儀礼における像と人との共演をめぐって - 比較美術史的観点から」、『死生学・応用倫理研究』、第 19 号、2014 年、pp.210-232.

秋山聰、「聖なる宝物 - 天と地をつなぐモノ」、『人文知』、第 2 巻、東京大学出版会、2014 年。

芳賀京子、「アゴラクリトス作《ラヌスのネメシス》- 台座浮彫の解釈と神像の意味」、『西洋古典学研究』、第 62 号、2014 年、pp.1-12.

京谷啓徳、「武器甲冑は何を語るか」、『ポルディ=ペッツォーリ美術館展図録』、2014 年、pp.50-55.

Akira Akiyama, "Similarities between Buddhist and Christian Cult Images: On Statue Dressing and Relic Insertion", in: *Synergies in Visual Culture/Bildkulturen im Dialog*, 2013 年、pp.71-81.

佐藤康宏、「黒い光の中、舟は二都の縁を巡る - 伊藤若冲『乗輿舟』』、『描かれた都』、大倉集古館編、東京大学出版会、2013 年、pp.1-20.

板倉聖哲、「東アジアにおける蘭亭曲水宴図像の展開」、『美術史論叢』、第 29 号、2013 年、pp.1-25.

板倉聖哲、「谷文晁 古画への眼差し - 東アジア絵画を中心に」、『生誕 250 周年 谷文晁』、2013 年、pp.186-189.

板倉聖哲、「谷文晁 - 東アジアへの眼差し」、『日本学』、第 37 号、2013 年、pp.75-206.

高岸輝、「土佐光信の室町絵巻」、『文化交流研究』、第 26 号、2013 年、pp.11-18.

高岸輝、「中世後期絵巻の様式展開」、『美術史論叢』、第 29 号、2013 年、pp.51-60.

高岸輝/小嶋菜温子/高橋亨、「世界の源氏物語絵 - いまなぜ光があてられたか』、『アナポリッシュ国文学』、第 4 号、2013 年、pp.4-48.

秋山聰、「西洋中近世における像を用いた儀礼をめぐるとのノート」、『美術史論叢』、第 28 巻、2012 年、pp.74-86.

秋山聰、「初期近世ドイツ美術における検閲をめぐるとのノート」、『西洋美術研究』、第 16 号、2012 年、pp.141-153.

板倉聖哲、「近世・近代日本における中国絵画鑑賞と画家像の変容 - 王建章の場合』、『美術フォーラム 21』、第 26 号、2012 年、pp.126-132.

板倉聖哲、「明代前期画壇与雪舟』、『明代浙派絵画学術検討会論文集』、2012 年、pp.283-295.

高岸輝、「十六世紀やまと絵様式の転換』、『文学』、13-5、2012 年、pp.144-152.

秋山聰、「足裏と足跡の図像学 - デューラーの足裏への執着をめぐるとの試論』、『SPAZIO』、第 70 巻、2011 年(オンライン・ジャーナル)

Akira Akiyama, "Interrelationship of Relics and Images in Buddhist and Christian Tradition: Comparative and Performative Aspects", in: *Spatial Icons: Performativity in Byzantium and Medieval Russia*, Moscow, 2011, pp.643-662.

板倉聖哲、「幕末期における東アジア絵画コレクションの史的位罫 - 谷文晁の視点から』、『美術史論叢』、第 28 巻、2011 年、pp.27-44.

[学会発表](計 19 件)

Akira Akiyama, "Invitation to Comparative Religious Art History: Mainly on Relic Insertion and Rituals involving Statues", Vortrag, Uni. Fribourg, Switzerland, 26.11.2014.

Yasuhiro Sato, "Reading in the Mountain: Representation of Seclusion in Landscape Paintings by Urakami Gyokudo", Reading Images - Imaging Reading, Uni.Zurich, Switzerland, 13.3.2014.

Akira Takagishi/Hans B. Thomsen, "Japanese Moving Arts through the Centuries: From Flying Buddha Images to Steamship Cargos", Oeffentliche Seminar, Uni. Fribourg, Switzerland, 25.11.2014.

Akira Akiyama, "An Attempt of the Study of Comparative Religious Art History", Mini-Symposium: Treasure, Ritual and Repositories in the East and in the West, Uni.Zurich, Switzerland, 24.11.2013.

Akira Akiyama, "The Sacred Footprint, examined from Comparative Perspectives", International Sympojium: SEN - On Lines and Non-Lines, Uni.Tokyo/KHI, Tokyo, 20.9.2013.

Yasuhiro Sato, "Cleaving the Tradition of Narrative Painting: Azusayumi by Iwasa Matabei", Text and Image Relations in East Asian Art, Freie Uni. Berlin/Museum of Asian Arts, Berlin, Germany, 26.6.2013.

板倉聖哲、「谷文晁 - 東アジアへの眼差し』、『美術文化における韓日』シンポジウム、東国大学校日本学研究所、韓国、2013 年 6 月 21 日。

板倉聖哲、「欧米美術館における水墨画コレクション - ボストン美術館を中心に』、『水墨画』シンポジウム、畠山記

念館、東京、2013年10月9日
Masaaki Itakura, "Chinese Painting in the Ashikaga Shogunal Family", Mini-Symposium: Treasure, Ritual and Repositories in the East and in the West, Uni. Zurich, Switzerland, 24.11.2013.

Akira Takagishi, "From Painting to Print to Painting: The Yuzunenbutsu-engi emaki and the Muromachi Shoguns", CIHA Naruto Colloquium, Otsuka Museum of Art, Naruto, Tokushima, 16.01.2013.

Akira Takagishi, "The Amewakahiko Narrative Handscroll in the Museum of Asian Art, Berlin and the Tosa School of the Muromachi Period", International Symposium: Moving Art - Asian Object and their Journeys, Uni. Zurich, Switzerland, 08.03.2013.

Akira Takagishi, "The Relationship and Collections of Imperial Court and Shogunate in the Muromachi Period", Mini-Symposium: Treasure, Ritual and Repositories in the East and in the West, Uni. of Zurich, Switzerland, 24.11.2013.

Akira Akiyama/Martina Stoye, "Introduction for the Section: On Religions and their Objectifications as seen from Intercultural Perspectives", CIHA 2012 in Nuremberg: The Challenge of the Object, Nuremberg, Germany, 16.07.2012.

板倉聖哲、「明代前期画壇与雪舟」、『明代浙派絵画国際学術検討会シンポジウム』、浙江省博物館、2012年5月13日。

板倉聖哲、「唐時代絵画に関する復元的な一考察-屏風壁画に注目して(關於唐代繪畫の一復元性考察-以屏風壁畫為焦點)」、『中國圖像文化史的流變-以魏晉與唐宋變革為中心』国際シンポジウム、台湾中央研究院、台北、台湾、2012年6月24日。

板倉聖哲、「元代的鍾馗圖像」、『芸術史与圖像』国際研討会、上海博物館、中国、2012年11月4日。

板倉聖哲、「沈周早期絵画制作之仿古意識」、『石田大穰-呉門画派之沈周特展』国際学術研討会、蘇州博物館、中国、2012年11月6日。

Akira Akiyama/Martina Stoye, "Guideline of the section: On Religions and their Objectifications as seen from Intercultural Perspectives", Pre-Conference for Section-Leaders of CIHA 2012, Nuremberg, Germany, 15.05.2011.

板倉聖哲、「幕末期における東アジア絵画コレクションの史的位

置と、『関西中国画コレクションの過去と未来』、泉屋博古館、京都、2011年10月22日。

〔図書〕(計6件)

佐藤康宏、『改訂日本美術史』、放送大学教育振興会、2014年、332pp.

高岸輝他、『絵が語る日本:ニューヨーク、スパンサー・コレクションを訪ねて』、三弥井書店、2014年、360pp.

佐藤康宏/辻惟雄他、『岩佐又兵衛全集』、藝華書院、2013年、321pp.

Akira Takagishi et al., *Archaism and Antiquarianism in Korean and Japanese Art*, Center for Asian Art of East Asia, University of Chicago, 2013, 240pp.

高岸輝他、『図像解釈学-権力と他者』、竹林舎、2013年、461pp.

高岸輝他、『近世やまと絵再考-日・英・米それぞれの視点から』、ブリュッケ、2013年、366pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 聡 (Akiyama Akira)

東京大学・大学院人文社会研究科・教授

研究者番号: 50293113

(2) 研究分担者

佐藤 康宏 (Sato Yasuhiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号: 5041990

板倉 聖哲 (Itakura Masaaki)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号: 00242074

研究分担者(平成25年度)

高岸 輝 (Takagishi Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

(なお平成24年度は連携研究者)

研究者番号: 80416263

(3) 連携研究者

京谷 啓徳 (Kyotani Yoshinori)

九州大学・大学院人文科学研究科・准教授

研究者番号: 70322063

芳賀 京子 (Haga Kyoko)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号: 80421840

畑 浩一郎 (Hata Koichiro)

聖心女学院大学・文学部・講師

研究者番号: 20514574

福島 勲 (Fukushima Isao)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号: 30422356

塚本 磨充 (Tsukamoto Maromitsu)

東京国立博物館・研究員

研究者番号: 00416265

田中 正之 (Tanaka Masayuki)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号: 70290872